

おみやげ資料集1

本当に障害は「それだけ」ですか？

2019.10・鈴木大介

闘病記「脳が壊れた」「脳は回復する」読者からのお便りなどを見る限り、「診断されている障害」だけが、その当事者のお困りごとではないケースが多いようです。

例えば失語の診断がなくても多くの当事者が鈴木「上手に会話できない」訴えに共感の声をお寄せくださいました。

一例として、我々当事者はどうして上手に話せないのか、「聞き取れない」「話せない」「会話ができない」に分けて、その理由を考えてみましょう。

【相手の話が聞き取れないのはなぜか】

1・思考速度の低下があり、相手が話した言葉の意味を考えているうちに相手の話がどんどん進んでしまう。

2・注意障害（選択的に注意すべきことだけに注意をはらうことができない）によって、「聞き流してもいいような話の枝葉」に考えが集中し、やはりその間に相手の話が進んでしまう。

3・周囲の騒音、光、臭い、あらゆる無視しても良い情報に注意が飛び、相手の話を聞くことだけに集中できない。

4・ワーキングメモリが低さと1～3が重なることで、相手の言葉を聞いた先から忘れていってしまったり、話が繋がらなくなり、相手がなにを言いたいのか分からなくなる。

5・こうした混乱が重なると、パニックに陥ってあらゆる思考が困難になる。

【上手に話ができないのはなぜか】

1・思考速度が遅く、自分の言いたいことを表すのに適切な単語や表現が頭に思い浮かんで言葉にするまで、とても時間がかかる。

2・思考速度が遅いため、相手の会話の際に自分の言葉を差し挟む「タイミング」

が掴めない。結果、一方的に相手が話し終わるのを待つしかない。

3・ようやく自分が話し始めても、言葉がうまく出て来ない際に相手に言葉を遮られ、結局また相手が一方的に話してしまうことが多い。

4・ワーキングメモリが低いため、自分が話している途中で自分がそもそも何を話したかったのかの論題や、すでに自分が何を話したのかを、忘れてしまう。せっかく思いついた言葉も相手の言葉に遮られている間に忘れてしまうことも。

5・遂行機能障害ゆえ、頭の中で相手に伝えたいことを筋道立てて組み立てることが非常に困難。

6・せっかく話せても、脱抑制で様々な感情のコントロールもできないために、正しく自分の気持ちを伝えられている気がなくて、早口で何度も同じことを繰り返してしまったり、焦ってシドロモドロになったり、相手の相槌や反応を一切無視して最後まで話し切ってしまう。

7・一生懸命言葉で伝えようとしても伝わった気がしないためか、手が勝手に動いて謎のジェスチャーを始めてしまう（自分でも異様だとわかっているにもかかわらずやめられない）。

8・結局どうにも自分の気持ちを相手に伝えられず、焦れば焦るほど1～7の症状が加速する。そうするうちにパニックに陥ってあらゆる思考が困難になる。

9・それでも頑張っていて話し続けていると脳が疲労して（易疲労）、スイッチを切ったように突然考えがまとまらなくなり、言葉も出て来なくなる。

【会話ができないのはなぜか】

1・思考スピードがおそくて適切な「へー、ふーん」「なるほど」「え？」等々の相槌や返事が一切入れられない。

2・言葉に「抑揚」がつけられず、せっかく話しても相手に微妙な意図が伝えられない気がする。「ええ」ひとつでも、驚き、呆れ、失望、納得、反感、聴き直し等々いろいろな抑揚と表情の組み合わせがあるが、そうした使い分けが全滅する。

3・相手の話題に「適切な表情」でリアクションすることができず困惑し、顔面が固まってしまう。相手からすると「ぼんやりして人の話を聞いていない」ように見

えるらしいが、当事者の脳内は焦りでフル回転です！

4・唐突に想定外のフリや質問があると、焦ることで余計に返答の言葉を考えるための思考速度が低下（ほぼ停止）し、黙り込んでしまうか、上記の早口の繰り返しなどになる。唐突な事があるのではないかと思うと、会話そのものが不安になる。

【受容部位には関係なく共通するお困りごとがあるようです】

こうしてみると、思考速度（脳の情報処理速度）の低下、注意障害、ワーキングメモリ低下、遂行機能障害などは脳のどこを受傷しても起きうることで、言語野に受傷があったり失語の診断がない当事者にも普遍的に「会話が難しい」の訴えがあるのは当たり前のことに思います。

また「話しづらい」と同様に、共通の機能問題をベースに、ほかにも当事者に共通するお困りごとは沢山あるようです（たとえそう診断されてなくても）。

ただ何より分かっていたいただきたいのは、こうした困難が理由で話せないことに、当事者はとてつもない苦しさを感じていることです。

※鈴木大介の刊行予定書籍より引用